

さる事あり。斯様の頸をば。主には見せぬ事ぞとて。側成敷の中へ投捨てて歸りける。去程に。御介借の爲に。御前に候はれける南の御方。此有様を見奉て。餘の恐しさと。悲しさに。御身も直手足も立で坐しけるが。暫く肝を静て。人心付けければ。敷に捨たる御頸を取上たるに。御膚も猶冷す。御目をも塞せ給はず。只元の氣色に見へさせ給へば。こは若夢にてや有らん。夢ならば。さむる現のあれかしと。泣き給へり。遂に有て。理致光院の長老。斯る御事と。承及び候とて。葬禮の御事執營み給へり。南の御方は頓て御髮落されて。泣々京へ上り給へり。抑淵邊が。宮の御頸を取ながら。左馬頭殿に。見せ奉らで。敷の傍に捨ける事。聊思へる所あり。昔周の末の代に。楚王と云ける王。武を以て天下を取ん爲に。戰を習し。劍を好事年久し。或時楚王の夫人。鐵の柱に倚傍て涼み給へるが。心地徒ならず覺て。忽懷妊し給ひけり。十月を過て後。生産の席に苦で。一の鐵丸を産給ふ。楚王是を怪とし給はず。如何様。是金鐵の精靈成べし。干將と云ける鍛冶を召れ。此鐵にて寶劍を作て進すべき由を仰らる。干將此鐵を賜て。其妻の鐵錐と共に吳山の中に行て龍泉の水に淬て。三年が内に。雌雄の二劍を打出せり。劍成て未奏せざる前に。鐵錐干將に向て云けるは。此二の劍精靈暗に通じて。座ながら怨敵を滅すべき劍なり。我今懷妊せり。産子は必ず。猛て勇める男子成べし。然ば一の劍をば。楚王に獻る共。今

一の劍をば。隠して子我に與へ給べしと云ければ。干將鐵錐が申付て其雄劍一を楚王に獻して。一の雌劍をば未胎内にある。子の爲に深く隠してぞ置ける。楚王雄劍を開て見給に誠に精靈有と見へければ。箱の中に收て置れたるに此劍箱の中にして。常に悲泣の聲あり。楚王怪て群臣に其泣故を問給に臣皆申さく。此劍必ず雄と雌と二有べし。其雌雄一所に有ざる間。是を悲て泣者なりと奏しける。楚王大に怒て。則干將を召出され。典獄の官に仰て。首を刎られけり。其後鐵錐を生り面貌尋常の人に替て。長の高事。一丈五尺。力は五百人が力を合たり。面三尺有て。眉間一尺有ければ。世の人其名を。眉間尺とぞ名付ける。年十五に成ける時。父が書置ける詞を見るに

日出北戸南山其松
松生於石劍在其中

と書り。扱は此劍北戸の柱の中に在と心得て。柱を破て見るに果して一つの雌劍あり。眉間尺を得て。天晴楚王を討奉り。父の仇を報せばやと思事。骨髓に徹れり。楚王も眉間尺が憤を聞給て。彼世に有ん程は。心安からず思はれければ。數万の官軍を差遣して。是を責られけるに。眉間尺一人が勇力に摧れ。又其雌劍の刃に觸て。死傷する者幾千万と云數を知らず。斯る所に。父干將が古への知音成ける。甌山人來て。眉間尺に向て云けるは我汝が父干將と。交りを結事年久しか

りき。然れば其朋友の恩を謝せん爲。汝と共に楚王を討奉べき事を謀べし汝若父の仇を報せんと成らば。所持の劍の鋒を三寸。嚙切て。口の中に含て死べし。我汝が頸を取て。楚王に獻せば。楚王悦で必ず汝が首を見給ひん時。口に含る。劍の先を楚王に吹懸て。共に死べしと云ければ。眉間尺大に悦で。則雌劍の鋒三寸喫切て。口の内に含み自ら己が首を搔切て。客の前にぞ指置ける。客眉間尺が首を取て。則楚王に奉る。楚王大に悦で。是を獄門に懸られたるに。三月迄其首爛す目を睛齒を切常にはがみをしける間。楚王是を恐て敢て近付給はず。是を鼎の中に入。七日七夜迄煮られける。餘につよく煮られて此首少し爛て。目を塗たりけるを。今は仔細あらじとて。楚王自ら鼎の蓋を開させて。是を見給ける時此首口に含たる。劍の鋒を。楚王にはつと吹懸奉る。劍の鋒誤す楚王の首の骨を切ければ。楚王の頸忽に落て鼎の中へ入にけり。楚王の頸と眉間尺が首と煮上る湯の中にして。上に成下に成喫合けるが。動れば眉間尺が首の下に成て。喫負ぬべく見へける間。客自ら己が首を搔落して。鼎の中へ投入。則眉間尺が首と相共に。楚王の首を喫破て。眉間尺が首は死して後。父の仇を報じぬと呼り。客の首は。泉下に朋友の恩を謝しぬと悦ぶ聲して共に皆煮爛て失にけり。此口の中に含たりし。三寸の劍。燕の國に留て。太子丹が劍と成。太子丹。荆軻秦舞陽をして。秦始皇を伐んとせし時。自ら差圖の箱

の中より飛出て。始皇帝を追奉しが。薬の袋を投懸られながら。口六尺の銅の柱の半を切て。霧に三つに折て失たりし。と首の劍是あり。其雌雄二つの劍は干將鑊那が劍と云れて。代々の天子の寶たりしが。陳代に至て。俄に失にけり。或時天に一つの惡星出て天下の妖を示事あり張華雷煥と云ける。二人の臣樓臺に上て。此星を見るに古き獄門の邊より。劍光天に上て。惡星と闘氣あり。張華怪で。光の指所を掘せて見るに件の干將鑊那の劍土五尺が下に埋てぞ残りける。張華雷煥是を取て。天子に奉らん爲に。自ら是を帶し。延平津と云澤の邊を通りける時。劍自ら抜て。水の中に入れて。雌雄二つの龍と成て。遙の浪にぞ沈みける。淵邊加様の先蹤を思ければ。兵部卿親王の。刀の鋒を喫切せ給て。御口の中に含れたりけるを見て。左馬頭に近付奉らじとぞ其御首をば藪のかたはらに捨けるとあり

○足利殿東國下向事付時行滅亡事

直義朝臣は鎌倉を落て上洛せられけるが。其路次に於て。駿河國。入江庄は海道第一の難所あり。相摸次郎が與力の者共。若道をや塞んずらんと。士卒皆是を危て思へり。是に依て。其所の地頭。入江左衛門尉春倫が許へ。使を遣されて。憑べき由を仰られたりければ。春倫が一族共。關東再興の時至ぬと。料簡しける者共の。左馬頭を討奉り。相摸次郎殿に馳參らんと云けるを。春倫つ

く、思案して。天下の落居は。愚蒙の我等が知べき所に非ず。只義の向所を思に。入江の庄と云は。本徳宗領にて有しを。朝恩に下し賜。此二三が年が間。一家を顧る事日比に増れり。是天恩の上に猶義を重たり。此時争か傾敗の弊に乗て。不義の振舞を致さんとて。春倫則御迎に参じければ。直義朝臣斜からず喜て頓て彼等を召具し。矢矧の宿に陣を取て。是に暫く汗馬の足を休。京都へ早馬をぞ立られける是に依て。諸卿議奏有て急足利宰相高氏卿を。討手に下さるべきに定りけり。則勅使を以て此由を仰下されければ相公勅使に對して申されけるは。去ぬる元弘の亂の始高氏御方に参せしに由て。天下の士卒皆官軍に屬して勝事を一時に決し候き。然れば今一統の御代偏に高氏が武功と云つべし。抑征夷將軍の任は。代々源平の輩功に依て。其位に居する例勝て計べからず。此一事殊に朝の爲家の爲望深き所あり。次には亂を鎮治を致す。謀を以て士卒功有時節に賞を行に如くはあし若注進を経て。軍勢の忠否を奏聞せば。擧達道遠して。忠戦の輩勇をあすべからず。然ば暫く東八箇國の管領を許され。直に軍勢の恩賞を執行ふ機に。勅裁を成下され夜を日に繼で罷下て。朝敵を退治仕るべきにて候。若此兩條勅許を蒙らざるば。關東征伐の事。他人に仰付らるべく候と申されける。此兩條は天下治亂の端あれば。君も能々御思案有べかりけるを。申請る旨に任て。左右亦く勅許有ける社。始終如何との覺へけ

る。但し征夷將軍の事は。關東靜謐の忠に依るべし東八箇國の管領の事は。先仔細有べからずとて。則繪旨を成下されける。是のみあらず。忝も天子の御諱の字を下されて。高氏と名乗れける。高の字を改めて。尊の字に成されける。尊氏卿東八箇國を管領して。所望輒く道行て。征夷將軍の事は。今度の忠節に由べしと勅約有ければ。時日を回さず。關東へ下向せられけり。吉良兵衛佐を先立て。我身は五日引さがりて。進發し給けり。都を立れる日は其勢僅に五百餘騎有しか共。近江。美濃。尾張。三河。遠江の勢馳加て。駿河國に付給ける時は。三万餘騎に成にけり。左馬頭直義。尊氏卿の勢を合て。五万餘騎。矢矧宿より取て返して。又鎌倉へ發向す。相摸次郎時行是を聞て。源氏は若干の大勢と聞ゆれば待軍して。敵に氣を吞れては叶いじ。先ずる時は人を制するに利有とて。我身は鎌倉に在ながら。名越式部大輔を大將として。東海東山兩道を押て賣上る。其勢三万餘騎。八月三日。鎌倉を立んとしてける夜俄に大風吹て。家々を吹破ける間。天災を遁ん迎。大佛殿の中へ逃入。各身を縮て居りけるに大佛殿の棟梁微塵に折て倒ける間。其内に集居たる軍兵共。五百餘人一人も残らず。壓にうて、死にけり戰場に趣く門出に。斯る天災に逢此軍墓ししからじと私語さけれ共。扱有べき事ならねば重て日を取。名越式部大輔鎌倉を立て。夜を日に繼で路を急ける間。八月七日。先陣已に遠江の佐夜の中山を越けり。足利相公

此由を聞給て。六韜の十四變に。敵長途を経て來らば。急に撃べしと云へり。是太公武王に教る所の兵法なりとて。同八日の卯刻に。平家の陣へ押寄て。終日闘くらされけり。平家も此を先途と。心を一つにして。相當る事并餘箇度。入替く戦けるが。野心の兵後に在て。跡より引けるに。力を失て。橋本の陣を引退さ。佐夜の中山にて支たり源氏の真先には。仁木細川の人々。命を義に輕じて進たり平家の後陣には。諏訪の祝部身を恩に報じて。防戦けり。兩陣互に勇氣を勵して。終日相戦けるが。平家此をも破られて。箱根の水飲の峠へ引退く。此山は。海道第一の難所なれば。源氏左右かく懸り得じと思處に。赤松筑前守貞範差しも嶮き山路を。短兵直に進で敵の中へ懸入て。前後に當り。左右に激しけり。勇力に拂はれて。平家又此山をも支ず。大崩迄引退く清久山城守返し合て。一足も引ず。闘けるが。源氏の兵に組れて。腹切間もや無かりけん。其身は忽に虜れ。郎従は皆討れにけり。路次數箇度の合戦に打負て平家やたけに思へ共。叶はず。相摸川を引越て。水を阻て支へたり。時節秋の急雨一通りして。川水岸を浸ければ。源氏よも渡しては懸らじと。平家少し油断して。手負を扶馬を休て。敗軍の士を集んどしける所に。夜に入て。高越後守二千餘騎にて。上の瀬を渡し。赤松筑前守貞範は。中の瀬を渡し。佐々木佐渡判官入道道譽と。長井治部少輔。下の瀬を渡して。平家の陣の後へ回り。東西

に分れて。同時に時をどつと作る。平家の兵。前後の敵に圍れて。叶はじとや思けん。一戦にも及ばず。皆鎌倉を指して引けるが。又腰越にて返し合て。葦名判官も討れにけり。始遠江の橋本より。佐夜の中山。江尻。高橋。箱根山。相摸川。片瀬。腰越。十間坂是等十七箇度の戦に。平家二万餘騎の兵共。或は討れ。或は疵を蒙りて。今僅に三百餘騎に成ければ。諏訪三河守を始として。宗徒の大名四十三人。大御堂の内に走入。同く皆自害して。名を滅亡の跡にぞ留ける其死骸を見るに。皆面の皮を剥て。何れをそれ共見分ざれば相摸次郎時行も。定て此内にぞ有らんと。聞人哀を催しけり。三浦介入道一人は如何して遁たりけん。尾張國へ落て。舟より揚げる所を。熱田の大宮司是を虜て。京都へ上せければ。則六條河原にて。首を刎られけり。是のみならず。平家再興の計略。時や未至らざりけん。又天命にや違けん。名越太郎時兼が。北陸道を打順て。三万餘騎にて。京都へ責上りけるも。越前と加賀との堺大聖寺と云所にて。敷地。上木。山岸。瓜生。深町の者共が。僅の勢に打負て。骨を白刃の下に碎れ。恩を黄泉の底に報せり。時行は已に。關東にして滅び時兼は又北國にて討れし後は。未々の平氏共。少々身を隠し。貌を替て。此の奥。彼の浦の邊りに有といへ共。今は平家の立直る事有難しとや思けん。其昔を忍し人も。皆怨敵の心を改て。足利相公に。屬し奉らずと云ふ者無かりけり。扱こそ尊氏卿の威勢自無に重く成て。

276
480

四六判雅美
洋紙上質

十錢文庫

各冊
實價十錢
郵稅四錢

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----------------|----|----------------|----|----------------|----|-------------------|----|---------------|----|-------------------|----|---------------|----|---------------|----|-----------------------|----|-------------------|----|-------------------|----|---------------------|----|-----------------|----|----------------|----|-----------------|----|-----------------|----|-------------------|
| 17 | 爲永春水著いゝろは文庫(一) | 16 | 大槻誠之解訓蒙日本外史(二) | 15 | 大槻誠之解訓蒙日本外史(一) | 14 | 十返舎一九名著東海道中膝栗毛(後) | 13 | 湯淺元禎輯錄常山奇談(後) | 12 | 曲亭馬琴名著夢想兵衛胡蝶物語(後) | 11 | 室鳩巢著鳩翁道話(全) | 10 | 貝原益軒著大和俗訓(全) | 9 | 曲亭馬琴傑作美濃舊衣お胸才三八丈奇談(全) | 8 | 十返舎一九名著東海道中膝栗毛(前) | 7 | 曲亭馬琴名著夢想兵衛胡蝶物語(前) | 6 | 柳亭種彦名著評釋繪入修紫田舎源氏(一) | 5 | 舊雨樓校註萬治伊曾保物語(全) | 4 | 靜村迂生序神皇正統記(全) | 3 | 寺門靜軒著評釋江戸繁昌記(全) | 2 | 曲山人補綴繪入當世娘節用(全) | 1 | 湯淺元禎輯錄常山紀談(前) |
| 34 | 涉庵子編輯武將感狀記(全) | 33 | 學庸論孟傍訓四書記(全) | 32 | 馬淵安定序訂正太平記(一) | 31 | 平田止水居士輯一休諸國物語(全) | 30 | 曲亭馬琴名著皿屋鄉談(全) | 29 | 葉室大納言著平家物語(上) | 28 | 自笑其碩著八文字屋集(全) | 27 | 奥田壽太講心學道の話(全) | 26 | 梅亭鷲叟序大岡仁政錄(全) | 25 | 大槻誠之解訓蒙日本外史(完) | 24 | 十返舎一九名著木曾道中膝栗毛(下) | 23 | 大槻磐溪著評釋新蒙訓近古史談(完) | 22 | 大槻誠之解訓蒙日本外史(四) | 21 | 大槻誠之解訓蒙日本外史(三) | 20 | 曲亭馬琴名著旬殿實々記(完) | 19 | 伴藁蹊著近世畸人傳(完) | 18 | 十返舎一九名著木曾道中膝栗毛(上) |

終

